

B—53 和服構成における標付けの研究(第2報)  
星鰻を使った標付け

東筑紫短大 宇城 カ子  
○檜木 和子

1. 和服構成においては普通型紙を使わないので標付けが非常に重要な作業になっている。その標付に使用する道具として宇城カ子氏の考案された星鰻について九州家政学会で第1報を発表した。今度は実際によく使われる和服地を用いて各布に適する標付方法を見出し、同時に星鰻の特徴をつかんでみようとした。

2. ①先般と同じ実験布を4枚重ね角べら、焼鰻、星鰻で標し、標のつき工合を比較した。焼鰻および星鰻の温度は120度前後とした。

②実際に和服に使用されている布10種を選び①と同様に標しその結果を比較した。なお、これはスライドに作った。

③本裁女物衿長着の構成実習において、学生50名に星鰻を使用させその結果を報告させた。1. 標がよくついたか。2. 日数がたってもよく見えたか。3. 待ち針が打ちやすかったか(標が合わせやすかったか)その他。

3. よい標付けの条件を考え、2つの実験の結果をその条件にあてはめて各布とへらの関係を図表にまとめた。その結果普通の焼鰻は織方によって経と緯のへらのつき方が違うが、星鰻はただ一つの点によって示されるので標の位置がはっきりしており、待ち針が打ちやすいことが分った。しかし柄物によっては標が見つけ難いことがあるので、糸じるしが必要になってくる。化織にも星鰻はよいが日数がたつと消えやすいのでこれも糸じるしが必要、星鰻の特徴は丈と幅が同時に標される所にある。